

H31地域協働研究（ステージⅠ）

H31-I-07「先発産地をキャッチアップするためのマーケティング戦略に関するフィージビリティースタディー」

研究提案者：岩手県内水面水産技術センター

研究代表者：山本健（総合政策学部）

共同研究者：岩手県内水面水産技術センター

<要旨>

岩手県の内水面養殖漁業は、内陸部の湧き水などを利用したアユ、ヤマメ、イワナといった食用淡水魚の生産と主に海面養殖向けのギンザケやトラウトサーモンの種苗生産との二つに大別できる。いずれもそれらを担う経営体は中小零細規模の事業所が大半であり、風水害や魚病リスク、販売価格リスク、餌料価格や輸送コストの高騰、生産や販売面における技術劣位といった経営課題に直面している。他方で、日本人が好きな魚についてのアンケート調査でサケマス類がトップになるなど、水産商材としての人気を背景に、国内でもサーモン養殖が一大ブームとなった。これまでの冷水性の魚というイメージを覆すように、九州、四国、中国、近畿といった関東以西の地域でも盛んに取り組む地域が急増している。岩手県で養殖されるサケマス類の稚魚は、2011年の東日本大震災によって三陸沿岸で行われる海面養殖向けの需要が途切れたことがきっかけとなって、海面養殖用種苗として全国に出荷された。しかしながら、養殖地により近い地域で生産される種苗と比べると輸送コスト面で太刀打ちができず、また発育のよさに代表される生産効率面では輸入種苗にかなわず、種苗生産地としてのアドバンテージを徐々に失いつつある。本研究では、県内の内水面養殖漁業経営体が直面する課題のうち、マーケティング戦略に着目して、国内各地における先進事例の調査を通じた本県への適用可能性を検討した。

1 研究の概要（背景・目的等）

近年、海面での大規模養殖の動きが進んでおり、国内のサーモン市場の需給状況は今後大きく変化すると思われる。加えて、これまで海面養殖に対して消極的だった岩手県が本格的にサーモン養殖に乗り出したことも大いなる期待材料である。冷涼な気候で水源からも近い東北地方の内水面養殖事業者に養殖用種苗の供給への期待が寄せられている。ところが岩手県内の内水面養殖事業者の多くは零細な規模で経営されており、多額の投資に二の足を踏んでいるのが現状である。

本研究では、各地のご当地サーモンのブランド化・販売を支援する行政や商工機関、海面養殖業者によるマーケティング戦略を把握し、国や県の水産研究機関が推進する技術動向を踏まえながら、県内の内水面養殖業者にとって最も低リスクで、高まる養殖用種苗の供給ニーズに応えていけるのかの方向性を示すことになる。

2 研究の内容（方法・経過等）

全国各地のサーモン養殖に関わる諸団体に対する聞き取り調査を下記の通りに実施した。

・サーモンのブランド

信州サーモン（長野県）、渥美プレミアムRASサーモン（愛知県）、江戸前銀鮭（千葉県）、讃岐サーモン（香川県）、境港サーモン、とっとり琴浦グランサーモン（鳥取県）、淡路島サクラマス（兵庫県）、みやぎサーモン（宮城県）、海峡サーモン（青森県）、宮古トラウトサーモン、岩手大槌サーモン、久慈ギンザケ、八幡平サーモン、姫神サーモン（岩手県）

・養殖事業者

林養魚（愛知県）、若男水産（兵庫県）、弓ヶ浜水産、鳥取林養魚場、日本養魚技術（鳥取県）、JF香川県漁連（香川県）、(株)西川（千葉県）、マルト水産（長野県）、マルハニチロ（山形県）

・試験研究機関

瀬戸内水研屋島庁舎（香川県）、長野県水産試験センター（長野県）、東北水研宮古庁舎（岩手県）

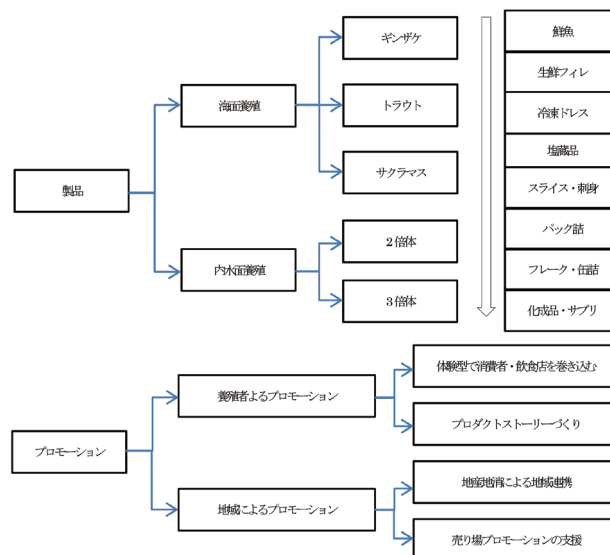
・関連事業者

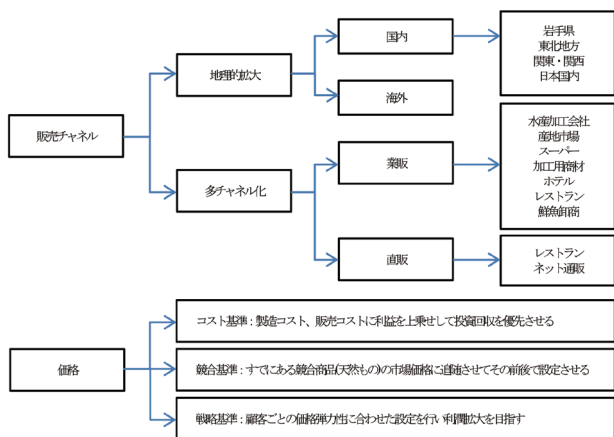
ニチモウ（東京都・宮城県）、日清丸紅飼料（宮城県）

・行政・商工機関

南あわじ市（兵庫県）、宮古市（岩手県）、安曇野商工会（長野県）

・マーケティングの4Pを用いた戦略の検討





3 これまでの調査から得られた示唆

養殖用種苗生産地としての岩手県のポジション

内部要因	強み	内水面での養殖事業者、施設、ノウハウの集積と蓄積、地理的な条件に恵まれる(冷涼な気候、豊富な湧水)
	弱み	個々の経営体の規模が小さく投資負担に耐えられない、人手不足・後継者不足、大消費地から離れ輸送コスト分が不利
外部要因	機会	県内各地で大規模な海面養殖がスタート、全国的に見ても国産養殖サーモン種苗に対する需要は拡大傾向
	脅威	飼料コストの高騰、サーモンの国際価格によって受ける影響が甚大、他県における閉鎖式陸上養殖による種苗生産の進展

養殖用種苗に対する需要の試算

岩手県ではこれまで積極的には行われてこなかった魚類の海面養殖が沿岸各地で活発に行われるようになり、ここ数年以内に数千トン規模の生産体制になることが予想されている。

仮に海面養殖サーモンの生産目標値を5,000トンに設定すれば、海面での増重倍率を5倍、飼育歩留まりを70%、種苗サイズを400g/尾、出荷サイズを2kg/尾とすれば、必要な種苗は約360万尾、重量は1,430トンが必要となる。現在の岩手県における養殖ニジマスの生産量はその10分の1程度に過ぎない。

日本水産グループは東日本大震災で被災した宮城県女川町におけるギンザケ生産拠点を鳥取県境港に移設して操業を開始して、現在の生産規模は年2,000トン程度となっている。種苗の生産は自社グループ内だけでは足りず、林養魚場が鳥取県や琴浦町からの補助を受けて新設した閉鎖循環式陸上養殖施設からの供給に依存しているという例がある。同社を中心に進めている大槌町でのサーモン養殖ではそれを上回る規模への拡張を計画しており、種苗供給能力の増強は急務と言える。

岩手県におけるブランドサーモン

名称	品種	生産主体	概要
八幡平サーモン	ニジマス	清水川養鱒場	八幡平市金沢清水の湧水。養殖期間は3年、2.0kg以上のサイズを通年出荷。飲食店のみに出荷。
姫神サーモン	ニジマス	桜養鱒場	盛岡市玉山の生湧水で飼育した三倍体。2年で出荷。あらいやルイベに加工してスーパー、鮮魚店で販売。
久慈ギンザケ	ギンザケ	久慈市漁協	資材、種苗の供給から流通までニチモウの支援の下でスタート。2021年シーズンまでに年120トン体制を目指す。
宮古トラウトサーモン	ニジマス	宮古市・宮古漁協	二戸市で生産された稚魚を11月に生簀に入れ4月までに大きいもので3kg程度に。日清丸紅飼料が餌料供給、飼育ノウハウ提供。
岩手大槌サーモン	ギンザケ、ニジマス	新おおつち漁協	日本水産、弓ヶ浜水産が漁協と共同で試験操業を開始。魚種を絞り込み、数年以内に年3000トン程度の生産を目指す。

県内には内陸部を中心に小規模な内水面養殖事業者が散在しているが、そこで生産されている食用のマス類は高々200g程度のサイズのものであり、海面養殖に求められている400gサイズのもので既存の施設やマンパワーで増産するのは容易ではない。さらに出荷時期が11月から12月に集中すること、それに合わせてへい死リスクの高い夏場に在庫を増大させなければならない点を考えると、その投資負担は中小零細規模の事業者には耐えられるものではない。

4 今後の具体的な展開

ここ数年で急展開を見せる岩手県におけるサーモン養殖は、その種苗を生産する内水面養殖事業者にとって大きなチャンスであることに疑いはないものの、既存の養鱒場での増産では追いつかない場合、生産者間の連携などの負担軽減策が必要不可欠である。さらに海面養殖事業者との組織的な連携の下で計画的な生産・出荷体制の整備が求められる。